

津山 尚*: 野生ユキツバキの八重化する傾向について**

Takasi TUYAMA*: On the double-flowering trends of the wild snow camellias**

(Pl. XIV, XV & XVI)

本報告では、野生ユキツバキまたは野生‘中間種’において、八重化その他正常の花型からずれた型の現われやすい傾向をのべ、これらが長い栽培の諸過程を経て、現在ふつうに栽培されているヤブツバキ系の品種に影響を与えていることを述べた。

小生は以前の諸報告で(津山, 1949, 1956, 1957 a—c, 1958) ツバキの野生種と栽培種との関係について述べたが、本報告ではそれらとは別に野生種から栽培種への花型の進化について論じてみたい。上記の諸報告では、大体次のように述べている。「日本産のツバキの中太平洋に面した側(関西地方以西に全面的に)に多産し北陸、奥羽地方の海岸沿いには薄く分布自生しているヤブツバキは花型に変化性が少なく、野生の八重咲品のごときものは全く見たこともない。一方、北陸地方、奥羽地方南部の日本海に面する山陵(あるいは日本海型の気候、すなわち冬の多雪の影響を受けた)地方にはユキツバキが多産し、その花型の変化が著しい。また北陸地方においては山地のユキツバキ生育地帯と海岸沿いのヤブツバキ地帯との中間に両種の接触によって生じたと思われる中間型のツバキが自生し、この“中間地帯”において花型の変化は最も著しい。ユキツバキは福井県から北は秋田県まで分布しているが、これに接触可能な状態においてヤブツバキがやや多く分布しているのは耕地が広く開かれた現在では福井県から新潟県南部までである。したがって“中間地帯”はこの範囲内で最もよく見られる。」以上の論は、新潟大学農学部萩屋薫及び石沢進両氏によっての新潟県下における詳細な研究により、殆んど全面的に裏付けられた(萩屋・石沢, 1961)。

また次のようにも書いた。「以上のツバキの自然の分布状態から見て、ユキツバキ系の園芸品種が多数北陸から奥羽地方南部にまで栽培されていることは当然といえる。しかしこれらはいわゆる“忘れられた”品種であって、現在広く日本の各地で栽培され、あるいは植木屋のリストに載っている諸品種(これを以下では旧品種と呼ぶことにする。)とは別のものである。」

それでは、栄養部では殆んど例外なしにヤブツバキの性質を現わすこれらの旧品種の母体はどこから発生したのであろうか。小生の推論は次のようである。「これらユキツバキ系の諸品種は平安朝以来、文化交流路として東海道方面よりも発達していた北陸→

* 30 茶の水大学理学部生物学教室。Botanical Laboratory, Faculty of Science, Ochanomizu University.

** 文部省科学研究費 No. 4068 により一部の援助を受けた。(代表者: 佐竹義輔博士) This work was partly aided by the Grant of Ministry of Education, no. 4068 represented by Dr. Yoshisuke Satake.

京都の線を経て京洛に移入され、ここで品種の選別淘汰が行なわれて、その地の嗜好に合った整った花型、樹型を持つもののみが残され、これらが全国に広まった。」これが現在の旧品種である。

旧品種の樹型、葉などの諸性質は全くヤブツバキのそれである。ただわずかな例外的の品種においてのみ部分的にユキツバキの性質をあらわしているのに過ぎない。例えば有毛の葉柄を有し透明でより複雑な葉脈系を有する点では乙女ツバキ系、荒獅子系の旧品種などが注目されているのみである。それでも、現在の旧品種が純粋にヤブツバキから導かれたとは考え難い。ユキツバキの重要な性質の一つに枝を地面附近から叢生的に出す性質があるが、このような型のものは旧品種には一つもない。またユキツバキのもう一つの重要な特長である所の大きい葉身、短い葉柄、尖った鋸歯も旧品種には明かには現われていない。ユキツバキの花部の特長は複雑化した現在の旧品種中の八重花の中には直接には求め難い現状である。

ヤブツバキの野生品に花型の変化が非常に少なく、ユキツバキのそれに変化が多いのは丁度スハマソウの花型、花色が北陸地方に多くて、太平洋側に少ないと並行的である。旧品種中の一重咲の大部分は明かにユキツバキには無関係に作出されたものであろうが、以下にのべる複雑な八重品種の造成にはユキツバキおよび中間型ツバキが基礎的に大きい役割を果たしたものと見なければならぬ。

品種造成の中心にいた昔の人々が栽培品種の中で、栄養的部分からユキツバキの性質を除いて行った理由には少くとも2つあると思われる。第1は園芸植物としての風姿の問題である。不規則に叢出する枝や、花径の割合に大型の葉身は、あまり美しいとは思われなかったであろう。第2は栽培環境から来る絶対的な制約である。ユキツバキは日本海側の多雪地帯の気候にあまりにも適応しすぎているために、冬期に雪の保護がなく寒風に曝され、生理的にも乾燥するような太平洋側その他の似た条件の土地では実際に栽培が困難である。またユキツバキは春—夏期には落葉樹下のやや低温、多湿の気候を好むものであるから、夏期の日光直射下ではいわゆる葉焼けを起すことが多い。

上のような理由で、現在でも太平洋側に古くから（最近の移植は別として）栽培されているユキツバキ系品種を見ることは極めて例外的なことである。小生は栃木県鳴山神社山下の部落でそれが一株栽培されているのを今春発見したが、これが唯一の知っている実例である。日本海側と太平洋側とを隔てる山々が如何に高いとはいっても古来交通路がなかった訳ではない。関東地方におけるユキツバキ系の栽培の欠除も前に上げた観賞上および栽培環境条件の故に掃せしめられなければならない。

以前の報告で、旧品種中でユキツバキの性質を割合によく現わしているものに乙女系があるとのべた。旧品種中のオトメツバキ、ベニオトメなどの諸品種はいずれも花容は整然としていて、花卉数も多く、その重なり方にも乱れがない。ところが、北陸地方のユキツバキ系品種の中で乙女系を調べて見ると、品種が非常に多く、花容、色彩の変化

に富み、たいていは花弁数も少なく且つ形や配列が乱れている。また株ごとに多少異った形を示し、中間形の品種もあって、旧品種中におけるような compact な（確立した）品種を形成しないように見える。これから見て、乙女系は北陸地方で育成され、それが選別、淘汰されて今日広く栽培される乙女系旧品種となったことが推定される。このことは並行的な現象が見られる荒瀬子系においても同様に言えるのであるが、更にこの推論は旧品種中の八重品種に当てはめることができると確信する。

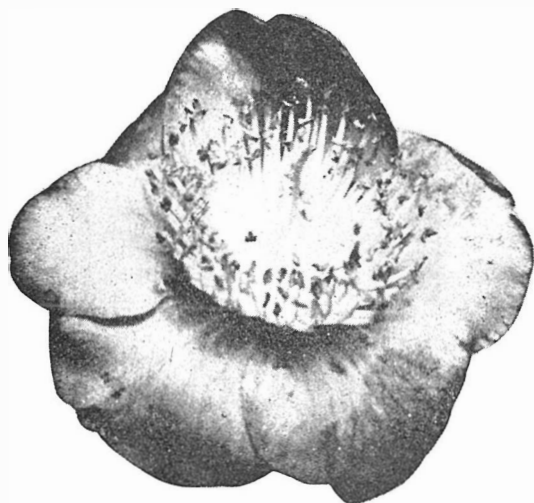


Fig. 1. "Higo" or "Baishin" trend in the wild snow camellia, at Sanpokumura, Iwafunegun, Niigata Pref. (Phot. T. Tuyama, May 29, 1956).

以上の推論に従って、小生は北陸地方を中心として1948年以來、多年にわたって野生一重ツバキから如何にして八重品種が導かれて来たかの材料になるものを調べてきた。北陸地方でも土地の開発が進んで来て、真の野生八重品種であると断言できるものは少い。

遠く離れた林中に自生しているものでも、その元は他から鳥などによって運ばれた種子によるものかも知れないし、また栽培八重品種の花粉が野生一重のもの柱頭にもたらされたものではないとの

確証もない。しかしこのような場合がもしあるとすれば、当然太平洋側でも起っていてもよいわけである。しかし実際にはこれがない。これはやはり北陸地方が八重品種の源泉であることを物語るものではあるまいか。(1962年、木戸慎蔵氏が高知県足摺岬の附近で伊佐および伊佐利で各一株、野生ツバキ林中に雄蕊が多少変化した株、および花柱が雄蕊の上につきでた株を発見され、その標本を送付して来た。ここは人家にあまり遠くない所である(木戸慎蔵, 1960: 足摺岬のツバキについて, 騰写刷 pp. 5)。

さて野生八重品種の中心である北陸地方において、最も源種に近い原始的な八重化傾向を示すものから3つの異った傾向を示して見よう。

傾向 1. (相沢型) 雄蕊が全部短かく且つ太くなり、葯も短大になる。花柱はもとのままの長さで、雄蕊群の上に突出している。雄蕊群の最外側は葯を失い内曲して先端が広がり、花弁化している。これは雄蕊と同長。新潟県東頸城郡松之山町、水梨の相沢剛先生の庭内植栽品は小生は年来注意している株で年によって花弁化した雄蕊の現われる

頻度が異なる。またすべての花にこれが現われることもない。この株は非常に古い株で数メートル四方を覆い少くとも 100 年以上を経ているものと想像されるが、来歴はつまびらかでない (Pl. XV, C, D; Pl. XVI, F)。同地方にこれと同様のものがないから山畑の品が直接に庭に持ち込まれたものと思われる。この附近は純粋なユキツバキ地帯である。これと殆んど同じ型と思われるものを富山市堀川中学の桐野秋豊氏が同県下の八尾町周辺で自生しているのを発見した。なお、傾向 1 を示し且つ花弁化した雄蕊をとみなない型は処々に発見されている。傾向 1 が進むと唐子 (月光) 型, Anemon-form となる。正完敬敏氏のヤエノユキツバキ (石川県後高山の避難小屋附近の谷間林中にて発見) は殆んど旧品種の型に近い花容をもっている (正宗, 1954; 津山, 1957 c)。Pl. XVI, G. は新潟県, 東頸城郡, 松之山町, 大荒土, 通称くそうず (原油の意の由, ここでかつて石油が湧出した。) で福原源十郎氏が 1957 年春に発見して自宅に移植したものの花を, 前記の相沢先生を通じて小生に送付されたものである。これも同傾向のものである。

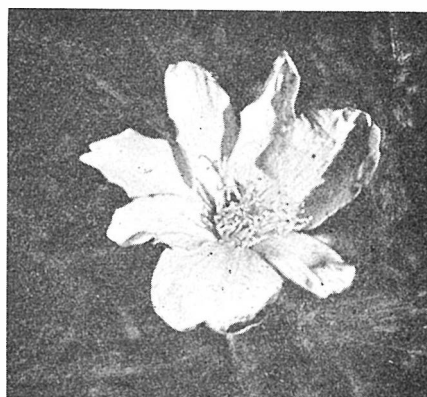


Fig. 2. "Lily" trend in the wild snow camellia. Aisawa, Matsudai-machi, Higashi-kubiki-gun, Niigata Pre. (Phot. T. Tuyama, May 26, 1957)

傾向 2. (富樫型) 富樫誠, 里見信生両氏と共に金沢市南部の山林中 (富樫新保の古保太吉氏所有の土地) で発見した型で雄蕊は縮少せず細くばらばらに立ち, 葯隔部が拡がって普通軍配型となり, その基部の両側に不完全な葯室またはその痕跡を止めている。これはペタロイド (petaloid) と称すが, 時にこれが漏斗状になる (Pl. XIV, A, B および Fig. 3 の型参照のこと)。これが進むと獅子型, Peony-form の八重となる。(富樫新保の一枚田で昭和 8—9 年頃に野生八重品が発見されたことを聞いたが, 移植の後に枯死した由である。正確な花型は残念ながら不明である。)

傾向 3. (桐野型) 雄蕊の中心部にペタロイドを生じるもの。上記の桐野氏が八尾町周辺の山地で多数発見されたもので, 傾向 1, 2 と異なる点は花軸上の花卉, 雄蕊, 雄蕊の順序が乱れて中央部に再び花卉 (小さい時はペタロイド) を生じたもの (Pl. XVI, H.)。この傾向が進むと最後に複雑な多頭型の八重品種となる。ここでは雄蕊輪が切断して数個以上の群になり, その各の中心に子房的なペタロイドを生じるようになる。Pl. XVI, I. は 1956 年 5 月 30 日に新潟県, 高田市附近, 宮之尾と郷津の間の "中間地帯" で小生が小苗を採集し, 7 年目の 1963 年春に初めて着花したもので, 雄蕊輪がばらばらに切れその間に大形のペタロイドが存在する型である。ここに挙げた 2 つの実

例より更に複雑化した野生八重品種を八尾町周辺で桐野氏が多数発見した(桐野, 1960)。これらの, 1, 2 については小生も実地にこれを見たが(Pl. XVI, J.), この例である。北陸の栽培品種中にはこれよりも更に複雑な八重品種が多数ある。小生が新潟県, 岩船郡, 山北村, 上大蔵の奥で 1956 年 4 月 29 日に発見した株はいわゆる中間地帯にあたって, 大体はヤブツバキ型であるが, 雄蕊筒が少し拡がっていて, 2—3 箇所ですれが切れていた。また金沢市木曽町の間中型自生地で 1957 年 4 月 16 日に同様のものを見た。他所にも記録は取っていないが同様に雄蕊筒が切れているものが発見されたが, これが傾向 3 の初期の現われではないかと思う。

傾向 4. これは八重化と直接に関係はないが所謂梅心型への傾向である。Fig. 1. は小生が新潟県, 岩船郡, 山北村, 碁石の奥 1.5 km 位の所で 1956 年 4 月 28 日に発見した型であって, 花卉が広く平開し, 雄蕊筒は短く広く開く型のものである。小生および富樫氏ら野外で共に研究した人々はこれを梅心型, ひいては肥後ツバキの型の前駆をなすもののように見ていたが, 未だ発表したことはなかった。最近, 新潟大学農学部の荻屋薫教授および石沢進氏はユキツバキ品種の研究を発表した時に, この型が新潟県下の海岸に近い中間地帯に特に多く発見されるとし, 肥後ツバキとの深い関連性を示唆した(荻屋・石沢, 1963)。この型は雄蕊は太く数少く四方に放射し, 中央の雄蕊を露出させる傾向がある。

傾向 5. これも直接に八重化には関係はないが, 花卉はあまり広くは開かず, 数が多く且つ細くなり, 各花卉が左右両方から内曲して中央に浅い溝を作る傾向を有するものでユリツバキ型, Lily-form の前駆をなすもののように見える。

Fig. 2. は新潟県, 東頸城郡, 松之山町, 会沢(あいさわ)の低いツバキ林の中で 1957 年 5 月 26 日に発見したものである。旧品種のユリツバキの葉は非常に細いのが特

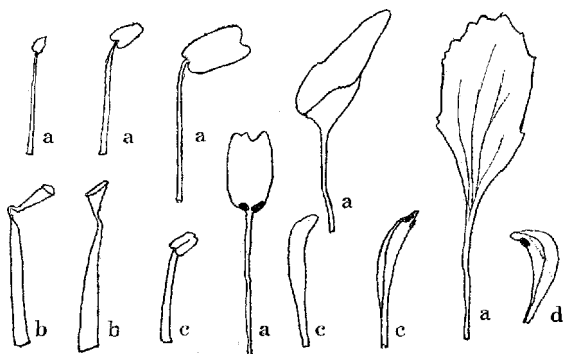


Fig. 3. Stamens and petaloids. a. A normal stamen and petaloids from cultivars at Yamamoto, Takarazuka City, Hyogo Pref. b. So-called pin-headed petaloids from the same. c. A normal stamen and petaloids from the same tree as Pl. XV, C, D and Pl. XVI, F. d. A petaloid from the intermediate form between snow and bush camellias at Yatsuo-machi, Toyama Pref., redrawn from Kirino, 1960, p. 22, Fig. 14. There are no differences in the variability of the petaloids between snow and bush camellia cultivars.

長であるが, これは典型的なユキツバキの葉をもっていた。このような花型をもったも

のは‘中間地帯’にも稀ではない。

なお以上では花径の大きさには触れなかったが、その大きさの変異はユキツバキおよび中間型において著しく、大きいものでは生時 11 cm にも達した(新潟県, 岩船郡, 上林村, 平林, 要害山麓の中間地帯)。または新潟大学高田分校の吉川純幹氏も高田市, 南葉山 (949 m) の稜線に近い森林中で花径がこれよりもやや大きいユキツバキの野生品を採って小生に送って来られた。

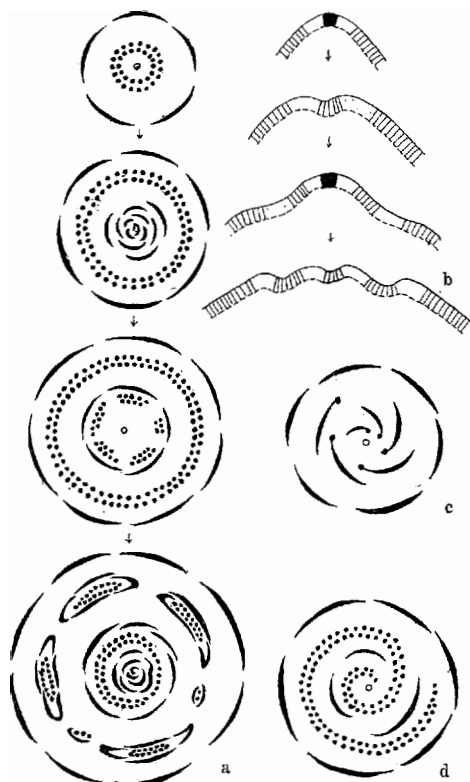


Fig. 4. a. Schematic representations of a normal and the double flowers, observed at Yamamoto, Takarazuka City, Hyogo Pref. b. The assumptive coarse of the double-flowering of the above, where ■, □, and IIII denote stylar staminal, and petalous zones respectively on the longitudinal sections of the floral axes.

旧品種の Peony 型八重花の中にはしばしば Fig. 3. b. に示されるような petaloid が 1—2 個, 時には数個混じっていて奇異な感を興える。これは柄の部分が多くて普通は濃い紅色を呈し, その先端は極めて細くくびれ, その先に白色小形の漏斗形の皺部を生じているものである。富樫氏と共にこれに仮にピンヘッド (pin-head) と名付けた (1957年春)。富山県下八尾町附近のユキツバキ型の八重栽培品種中にもしばしばこれが発見される。

また, 桐野氏は富山県上市町南方約 10 km の大岩で溪流に溶う集塊岩上で花糸が暗赤色を呈するユキツバキ (やや中間型に傾く) を発見し, 小生も氏の案内で 1963 年 5 月 4 日これを実見した。これを要するに旧品種で発見される殆んどすべての形質は野生品において, ユキツバキまたは‘中間地帯’で発見できるということである。

小生は 1955 年 3 月, 国立科学博物館でツバキに関する講演をしたが, Fig. 4, a—c. は当時兵庫県宝塚市山本町の植木商の庭々に植

えられてある旧品種を数 10 種あつめて花部を解剖した結果を schema 化して八重化の

経路を推定したもので、これを講演の掛図に用いたのである(桐野, 1960 は小生の idea によったものである)。傾向 3 の所で述べた複雑な八重化は同図の a. の経路をたどったものと推論した。同図 b. はこの経路が、花軸の生長点の陥入によって出来たことを示している。これは丁度 2—3 段の円筒を用いて作った望遠鏡(あるいは写真機の三脚を短かくして行く時の形に似ているのでテレスコープ現象(Telescope, 英語でもこの型の陥入の意味に用いる。))と呼びたい。陥入が何回も繰返されることによって同心円状の花軸がその回数だけ生じ、その先端から雌蕊、雄蕊、花弁と花部の側生器官が形成されて来る考えを示した。同心円状の花軸の先端に水平方向に波が打てば円が切れて多数個の小さい先端が出来、ここがそれぞれ一個の花に似た構造を取る(Fig. 4, a—b)。ただし、複雑な八重花では雌蕊そのものがペタロイドに化し、或はそれとペタロイド化した雄蕊と複雑に融合していることが多いので、実際に雌蕊らしい雌蕊が認められないことが多い。

Fig. 4, c. は各花弁 1 個に対してその一定方向の縁側面に各 1 個の雄蕊を伴生するものである。Fig. 4, d. は花弁も雄蕊も別々のラセンをなして花軸の先端部に登る型のもので Fig. 4, a. に示した同心円を作る傾向の中、同種の花部器官が横につながろうとする傾向のみを残したものであろう。Fig. 3, Fig. 4. に述べた諸型は旧品種から得られた材料であるが、すべて野生あるいは栽培のユキツバキ系の品種に現われていることは注意に値することである。ここに述べた八重花形成の理論的な面はすべて推定上のことであって未だ自身で証明してはいない。現在、一重の品種について花部を発生形態学的に調べているが、八重品種について将来適当な材料を使用して実験して見たいと思っている。

以上を総括するに、ヤブツバキ系のものの花型の変化は非常に少いのに関らず、一見ヤブツバキ風に見える多くの旧品種に見られ花型の著しい諸変化がすべて野生たると栽培たるとを問わずユキツバキ系の花型変化に一致するということである。それで、現在日本で一般に栽培されている旧品種の花容の変異は殆んどすべてユキツバキ系のそれに由来していると考えの外はない。

終りに、常にユキツバキの研究を鼓舞された朝比奈泰彦先生に感謝の意を表します。また、この研究を野外で共にし、あるいは研究材料や研究費を提供されたりした次の方々に心から御礼を申し上げます。武田薬品工業の武田長兵衛氏、三宅馨氏、同武田研究所桑田智氏、同渡辺武氏、同京都試験農園の八田亮三、渡辺喜太郎の両氏、日本園芸文化協会の方々、日本ツバキ協会の方々、特に石井安枝氏、埼玉県植物見本園の中村恒雄氏、新潟県山北村八幡森林組合の高橋稔氏、同、荒川町の富樫信平氏、新潟大学高田分校の吉川純幹氏、高田中学校の高橋節世氏、同県教育委員会の平松義尚氏、金沢大学理学部の正宗巖敬、里見信生両氏、広島大学教育学部の米山穰氏、山形大学農学部森邦彦氏、資源科学研究所の靱山泰一氏、土佐清水市保健所木戸慎蔵氏。特に武田研究所の

富樫誠，富山市堀川中学の桐野秋豊氏，新潟県東頸城郡松之町水梨の相沢剛先生らとは多年にわたって現地で行動を共にし，研究への関心を共通にしえた幸を深謝します。

Résumé

Wild double flowered camellias are very rarely found in the bush-camellia region (Tuyama, 1958), however they are frequently found in the pure snow camellia region or in the intermediate one located between the area occupied by the snow and the bush camellias along the mountainous district of the of Japan Sea side. In the author's mind, principal source of the common double-flowered cultivars must be attributed to the above mentioned two regions. This view was supported by Drs. K. Hagiya and S. Ishizawa through their minute statistical investigations in Niigata Pref. (Hagiya and Ishizawa, 1961).

There are three main types of double-flowering trends in the snow and intermediate camellias. The author will show hereafter some examples of the wild primitive, double-flowering forms, which might have been brought up to the domesticated garden camellia of today. In the first case, the peripheral stamens change to short petaloids, and the flower is inclined to become the Anemone form. (Pl. XV, G, D. and Pl. XVI, F, G.). In the second case, androecium change to an intermingling mass of cordate petaloids with long filaments or fairly large lanceolate one without filament. (Pl. XIV. A, B.). This form will be lead to the simple Peony form. In the third case, petaloids appear in the middle part of the androecium to form the more complicated Peony or Rose form with the intermingling of the true petal-like petaloids and stamens (Pl. XVI, H, I and J.) The advanced examples of the third case is shown schematically in Fig. 4, a. This advancement will be explained by the assumptive models showing the telescoping of the apex of floral axes as shown in Fig. 4, b. Actually, prototypes of all the types of the presentday domesticated double flowers have their counterparts among the wild snow and the intermediate camellias. In addition to these, the Higo- and Lily- trends are also found among the wild camellias on the Japan Sea side as shown in Fig. 1 and 2.

I must also draw attention of the reader to the fact, that there are on the Japan Sea side many kinds of stocks apparently classified as Otome series which have often fewer petals and showing stamens in the concave centre when fully opened, and consequently show informal double forms compared with the catalogu-

ed Otomes. As the informal Otome stocks are cultivated on the of the Japan Sea side in rather smaller areas respectively, the author is convinced that the Otomes were raised in relation to the snow camellias. All these facts seem to be in favor of the view that the variability found in the present day garden cultivars have been derived from the snow camellia itself or from the natural hybrids between the snow and the bush camellias.

Literature

- Sealy, J. R., 1937. Species of *Camellia* in cultivation. Journ. Roy. Hort. Soc. **62**(8): 352-369. Tuyama, T., 1949. On *Camellia rusticana* Honda (in Jap. with English summary). Journ. Jap. Bot. **24**: 97-100. Honda, M., 1952. The discovery of *Camellia rusticana*. Amer. Camellia Yearbook **1951**: 105-109 (Tuyama, 1949 was partly translated into English). Masamune, G. 1954. 北陸の植物 (Hokuriku Journ. Bot.) **3**-1: on the back of the cover. *Camellia rusticana*. Tuyama, T., 1956. On some morphological features of *Camellia japonica* and *C. rusticana* (in Japanese). Journ. Jap. Bot. **31**: 225-228, Pl. 3-4. ——— 1957 a. Snow camellia: Its distribution and relationship to garden camellias. Natur. Sci. Mus. (Tokyo) **23**: 119-135. ——— 1957 b. 我国の栽培ツバキについて——特に野生種との関係について, 日本植物園協会報 (Rep. Asos. Jap. Bot. Gard.) **1956**: 9-21. ——— 1957 c. 栽培ツバキの起源について. 図芸手帖 **7**-4: 5-7, 2 pl. ——— 1958. The wild camellias of the Japonica group in Japan and their relationship to garden varieties. Amer. Camellia Yearbook **1957**: 1-16. Satomi, E. (里見盈吉) 1956. Camellia varieties in Japan. ——— Garden forms of snow camellia p. 17. Kirino, S. (桐野秋豊), 1960. 雪椿の研究 (Snow camellia studies) 富山県における野生椿について国際椿研究所カメラ・シリーズ No. 1, pp. 30. Adachi, T. (安達潮花) 1960. 椿の鑑賞と生花 (Camellia—Its appreciation and artistic arrangement pp. 278). T. Watanabe, T. (渡辺武) 1961. ツバキと日本文化 (Camellias and the Japanese culture). 大和文華 No. **36**: 37-46. Nagiya, K. & S. Ishizawa, 1961. Studies on snow camellia (*Camellia rusticana*) I. On variation and distribution of native and domesticated camellia in Niigata Prefecture. Journ. Jap. Soc. Hort. Sci. **30**-3: 270-290, 2 pl. ——— 1963. 特異な花ユキツバキ 園芸新知識 **18**-1: 14-16 **18**-2: 17-19.

Explanation of the plates XIV~XVI

Pl. XIX. A, B. Primitive wild simple Peony form, discovered in Mr. Taki-

chi Kobo's forest at Togashi-shinbo, south of Kanazawa City, Ishikawa Pref. Now this is cultivated at Takeda's Experimental Garden at Ichijoji, Kyoto. (phot. T. Tuyama, Apr. 26, 1957).

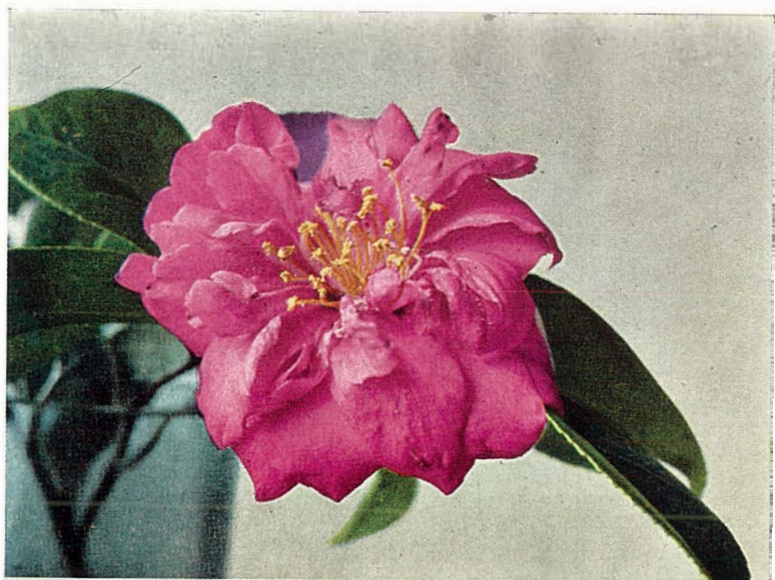
Pl. XV. G, D. Primitive Anemone form, cultivated at Mr. Takeshi Aizawa's garden, Mizunashi, Matsunoyama-machi, Higashi-kubikigun, Niigata Pref. (photo. T. Tuyama, May 6, 1963).

Pl. XVI. E. Normal wild snow camellia in the thicket near Aisawa, Matsudai-machi, Higashi-kubikigun, Niigata Pref. (photo. T. Tuyama, May, 26, 1957). F. From the same tree as Pl. XV G, D. (photo. T. Tuyama, May 6, 1963). G. Wild Anemone form, from Kusozu, Oarato, Matsunoyama-machi, discovered by Mr. G. Fukuhara and now growing in his garden. A flower was sent to the author by Mr. T. Aizawa. (photo. T. Tuyama, May 30, 1957). H. Wild double Peony form growing at Sasatsu-yama alt. ca. 140 m. (discovered and photographed by Mr. S. Kirino Apr. 22, 1959). I. A wild Rose form discovered in the intermediate region of snow and bush camellias. Grown from a seedling collected by the author between Miyano and Gozu, near Takada-City, Niigata Pref. and now cultivated in the author's garden. (photo. T. Tuyama, Apr. 15, 1963). J. Wild Peony forms near Shimo-sasahara, Toyama Pref. (discovered and photographed by Mr. S. Kirino, Apr. 25, 1959).

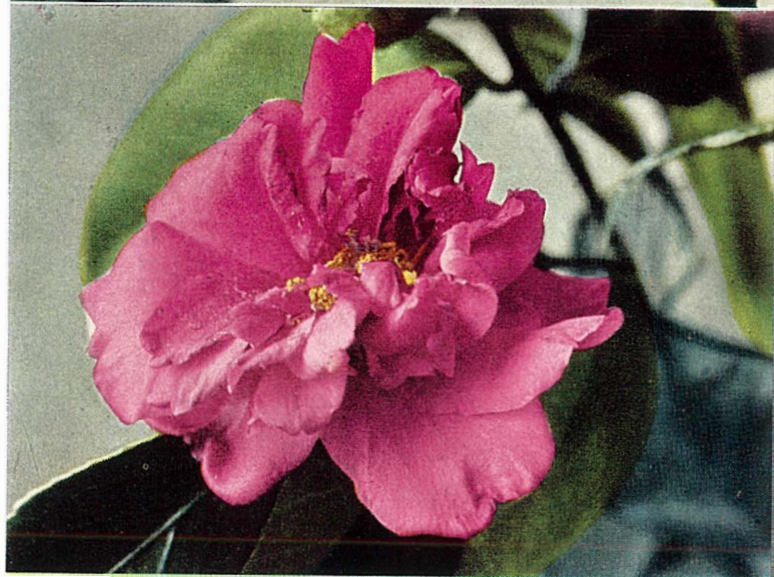
〇ソビとはなにか (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: What is "Sobi"

東京都内の百貨店の植物販売部で、ソビという名札のついているイネ科の小草を買った。実はその名の珍奇性につられて求めたのである。しらべるまでもなく、日本西部にあるイタチガヤ (*Pogonathemum crinitum* Kunth.) そのものである。しかし、これを園芸植物として売っているのに出合ったのは始めてである。このソビという名は、いままで聞いたことがないが、とにかく、こんな方言でも、どこかにあるのかも知れない。ソビという呼称は古名録にはカワセミという鳥の名としてある。植物ではミソハギのことを鼠尾草というが、イタチガヤの名としては耳あたらしい。とにかく、イタチガヤがソビという名で市販されていたことを一応記録しておく。中国の本である広州植物誌には金縁草、黄毛草、必子草、竹薔草などの名を列記して「生草薬店有出実」とあり、日射病のような病に用いるとするしている。また東大植物教室留学中の許氏も台湾でも、同じようなことがいわれ、氏もかつて、服用した経験があるといわれた。

A



B



T. TUYAMA: On wild double snow camellia

C



D



T. TUYAMA: On wild double snow camellia

E



H



F



I



G



J



T. TUYAMA: On wild double snow camellia